

【ラブレター】

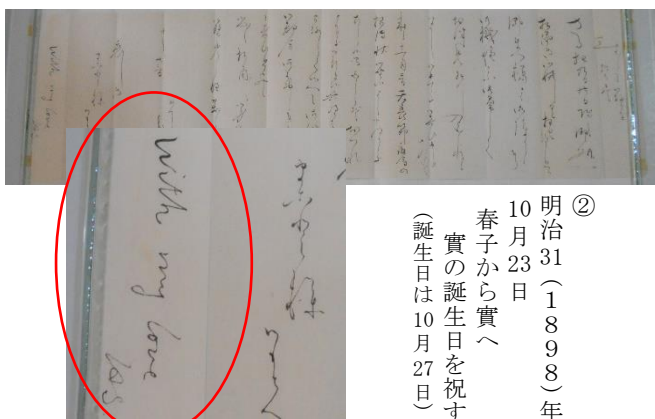
7月7日は七夕。年に1度、織姫と彦星が7月7日の夜に会えるという伝説です。

先月、推しの“イッピン”としてご紹介した『斎藤家・仁礼家結納目録』や七夕にちなみ、今月の“イッピン”は斎藤夫妻が交わした「ラブレター」をご紹介します。2人の書簡のやり取りは多数あり、實の誕生日を祝うものなど、慈愛に満ちた内容となっています。

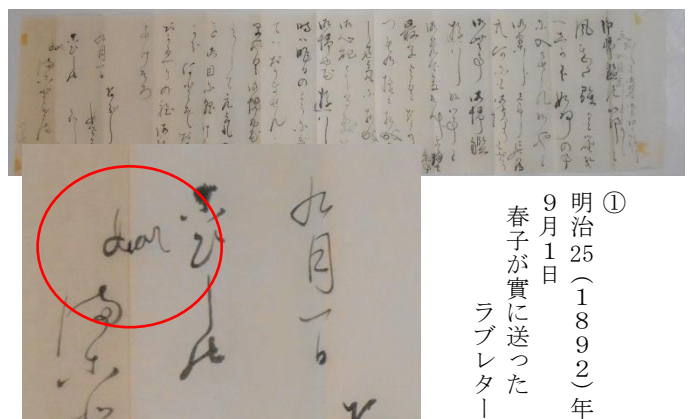
實の航海中や朝鮮総督時代離れて過ごす折など、互いに毎日のように便りを送りあっていました。そして手紙の最後には“恋しきまこと様”、“dear まこと”や“with my love”など、当時には珍しく愛を表現する言葉が添えられていました。

『英語は少女時代から稽古をさせられ、斎藤に嫁いでも引き続き稽古しました。稽古がきびしかったので心身ともに疲れ切ったような記憶がありますが、一生を通じて外国人との交際などに大変役立ったことを考えますと、これも両親のおかげであったと有り難く思っております。』と夫人の春子は当時を語っています。（「斎藤實夫妻を偲ぶ、私の生い立ち」より）春子が通った東洋英和女学校は、カナダ・メソジスト教会の婦人宣教師によるミッションスクールとして明治17（1884）年秋、麻布鳥居坂に開校。「敬神・奉仕」という建学精神の下、国際性豊かな近代知性を育む教育理念でした。實も、海軍兵学寮において、英国海軍士官である教官の指導により2年で英語を習得。留学時には欧米のマナー、ふるまいなどを体得しました。このおふたりにとって書簡を英文で綴ることは自然であり、愛を表現する言葉を添えることもありふれたことだったのかもしれません。

また、實が2度目の朝鮮総督時代、春子が療養のため、ひとり東京に滞在していたことがありました。實の息子^{ひとし} 齊の妻、静子曰く、「まるでお父さんは恋人に手紙を書く様に」春子に手紙や絵葉書などで京城（現在の韓国ソウル）の様子を送っていたといいます。（「斎藤實追想録」より）春子を想う實の気持ちが深く伝わってきます。



②
明治31（1898）年
10月23日
春子から實へ
實の誕生日を祝す
（誕生日は10月27日）



①
明治25（1892）年
9月1日
春子が實に送った
ラブレター

①【訳】

御帰艦の節二風甚た強く
御座候らへしかば如何の
事に入らせられ候やと御
案じ上申居候得共、何に
も御障りもなく御無事御
帰艦遊ハシ候御事と御め
度そんじ上候、扱て私
事最早よくなりいつもの
様ニ相成ヒン／＼して元
氣に相成候間、御心配被
下間敷候、今度御帰宅遊
ハした時ハ昨日のように
だれてハおりませんか
ら、早やく御帰宅あそは
して元氣の様子を御目に
懸けますから、何とぞお
はやくおかゑりの程御待
申あげそろ、あら／＼め
で度、かしく
九月一日 はるこ
こひつゝの dear まこ
とさま 参る
かへす／＼も御身御大切
ニ遊ハシ候様念し上候